ART KISS LETTER

熊本市現代美術館 アート・キッスレター

2017早春 vol.80

第28回熊本アートパレード審査員
ヤノベケンジさん

巻頭言

「ジブリの立体建造物展」が熊本に残したもの

熊本市内のメインストリート・通町筋の交差点周辺は、一年を通して賑わいを見せています。今回、その信号が赤から青へ変わるごとに、目の前にある熊本市現代美術館に押し寄せる観客の流れは圧巻でした。「ジブリの立体建造物展」の会期中、一貫して目立ったのは家族づれであり、とりわけその子供たちの生き生きした足どりは印象的でした。彼等は地上階から3階の美術館までのエスカレーターでは間に合わず、階段を駆け上がり、そして帰りには駆け下りて行くのでした。

多くの観客にとってこの展覧会は、すでに自分たちの記憶にあるジブリ世界と異なった新たな記憶を、身体に刻んだことと想像します。入り組んだ会場では馴染みの動画イメージが、静止した立体建造物や原画として次々と現れます。これは自分が静止して動画のアニメを見るという体験とは逆転した、こちらが動き、静止した原画や建造物に出合っていくという新鮮な体験となったことでしょう。

ここでは絵画、彫刻、建築が統合される有機的で創造的な空間造りが試みられました。スタジオジブリの創出する自然は凶暴であると同時に限りなく美しく、私たちが抱く畏怖の念に重なります。この「立体建造物展」は、私たちの美術館の広々とした空間を巧みに使い、劇的で余裕のある展示空間を生み出すことができました。

この展覧会の入場者数は20万人を超えました。これは大都市圏ではない地方公立美術館としては破格の記録と言えます。通常をはるかに超えた賑わいではありましたが、人の流れは概して円滑でした。この動員数で入場数時間待ち等の混乱は生じず常に整然としていたのは、特筆すべきことと思われます。

多くの観客、とりわけ子供たちの入館時と展覧会を見終わって美術館を去る時のあの輝く表情は、熊本地震を経験した後に、この展覧会がいやしと希望を与えてくれた証しであったと言えましょう。

熊本市現代美術館館長　桜井武

Contemporary Art Museum, Kumamoto

2017.2.18[土]—3.26[日]

CAMKコレクションvol.5
知っとるね？ くまもとのお宝、大公開てばい！

CAMK
www.camk.or.jp

KUMAMOTO ART PARADE

昨年4月に熊本地震が起きた際には、今回の熊本アートパレードを開催できる状況にあるのか、被災地の方々のことをとても心配していました。しかし出品された作品を見て、被災されて大変な状況にあるにもかかわらず、前向きに踏み出そうとする強いエネルギーを受けたので、少し安心した次第です。出品作品は非常にバラエティに富んでおり、楽しく審査することができました。今回のテーマ「未来のおみやげ」は、震災以前に決めていたものです。私自身も、「絶望的な状況からでも希望にあふれた発信ができる」力がアートにはきっとあると信じて活動しています。今回のテーマのもと、ポジティヴなエネルギーを発信する作品を多数見ることができ、嬉しく思いました。

第28回熊本市民美術展
熊本アートパレード

総出品数 269点

審査員　ヤノベケンジ（現代美術作家）

テーマ　「未来のおみやげ」

会期：平成29年1月28日（土）～2月12日（日）
主催：熊本市現代美術館（熊本市・公益財団法人熊本市美術文化振興財団）
協力：コラボレーターの会

井手宣通賞

中村妃菜《出発》
［平面部門］

井手宣通賞の《**出発**》は、熊本の象徴の一つである路面電車がモチーフです。昔からの変わらない姿で場所と場所とを繋いでいることが、過去から未来へと繋がるイメージと重なり、今回のテーマにマッチしていました。独特のデフォルメと色遣いによって夢のような世界が作られていますが、不思議な懐かしさも感じさせます。

熊本市現代美術館賞

光武美沙希《大丈夫だよ》
［平面部門］

熊本市現代美術館賞の《**大丈夫だよ**》は、細かく丁寧な仕事ぶりと、奥行きのある仕上がりを評価しました。この絵には、誰の心にも届くような安心感が表現されており、震災の恐怖を和らげてくれるような力があります。心の深いところに響いてくる作品で、まるで「心の薬」のようです。

アートパレード大賞（熊本市賞）

堀川仁彦《予知夢君》
［立体部門］

作品講評：ヤノベケンジ

アートパレード大賞の《**予知夢君**》は、機械的なものでありキャラクター的なもので、私の美意識や趣味性との類似点が多く、目を引くものでした。実際に起こったことを受けて、社会をどう変えていくかということを、具体的な形に表すことができています。また、仕上がりの精度の高さとユーモラスな形態は、美術館だけでなく街中にあったとしても存在感を放つと思います。科学の進歩とともに、本当に地震などを予知する機能を持ったものとして現れることを予感させ、現代社会とも接続できるような作品になっている点を評価します。

優秀賞

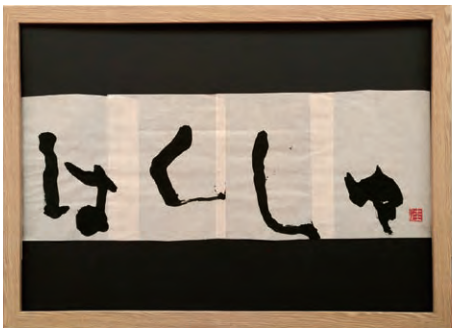
《はくしゅ》は、のびのびとした筆遣いが魅力的でした。人の心を一つにしたり、人々を元気づけたりする「拍手」という言葉の選択も、大変に良かったと思います。

《日本国》は、カリカチュア的でありながら、日本の伝統的な技法とも重なって、奥行きのある世界観が表わされていると思います。自分たちのアイデンティティを見つけて世界に発信しようとする、現代の若者の姿勢がうかがわれ、好感のもてる作品です。

《心地良い場面》は、見る人を飽きさせません。緻密で豊かな仕上がりです。画面に詰め込まれた幸福感や濃縮された喜びが、人々と共有されながら未来を作っていくようです。

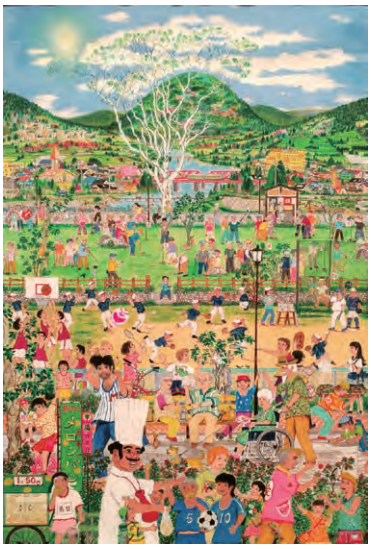
《ひかりのなかの子どもたち》は、まるで天国の天使たちと出会ったかのようです。被災地で撮られた作品ということで、子供のもつエネルギーが、悲劇を希望に変えてくれるようなイメージであると感じました。

《熊本ミニチュア計画》は、5年間のアーカイヴを映像として編集されたということで、震災前の美しい熊本を未来に届けるタイムカプセルのように出来上がっています。今回のテーマによく合っています。



佐村佳輝《はくしゅ》
［平面部門］

図師夏向《日本国》
［平面部門］



河野基春《心地良い場面》
［平面部門］

カワバタマイ《ひかりのなかの子どもたち》
［平面部門］

オーディエンス賞

来場者の皆さんの投票によって選ばれた賞です

平井敬一
《ウーマン・パワー》
［平面部門］

板東俊成
《熊本ミニチュア計画》
［映像部門］

審査員特別賞（ヤノベケンジ賞）

ヤノベケンジ賞の**《スマイル》**は、一見ゆるいモチーフで落書き風に描かれていますが、見た瞬間につい顔がほころんでしまうような、和やかな空気を醸し出しています。震災の深刻さから離れて、肩の力を抜きながらのびのびと生きようよ、といったメッセージを感じます。柔らかさの中にも強さを感じ、非常に惹かれました。

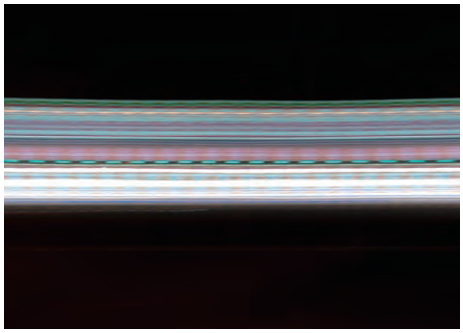
倉岡哲幸《スマイル》
［平面部門］

ナナイロヒメ
《フューチャー♡ガール》
［平面部門］

馬場暁子《記憶再生ヘルメット》
［平面部門］

杉本祐太《Intention》
［平面部門］

敷嶋明子《ポストマン》
［平面部門］



福山大夢《光線》
［平面部門］

奨励賞

《フューチャー♡ガール》は、一見単純なイラストのように見えますが、細かなデコレーションも施され、時代の空気のようなものを体現しています。新しい絵画に出来上がっていると思います。

《記憶再生ヘルメット》は、記憶を甦らせることができるヘルメット、という夢のある発明品を描いています。未来的な要素を、オーソドクスな技法の中に落とし込んでいることが非常に面白いです。

《Intention》は、さまざまな現代の人工物が描きこまれ、それらの持つ危うさのようなものが表現されています。繊細な構成とコラージュに、広がりのある絵画世界を感じました。

《ポストマン》は、世界観の作り方が素敵だと思いました。デッサンの軽妙さも非常に好感が持てます。モチーフであるポストマンは、手紙を未来へ運んでいく職業です。今回のテーマに相応しいものでした。

《光線》は、何がとらえられているのか、正体不明です。これはエネルギーなのか、時間の流れなのか。非常に抽象的な写真です。新しい概念の提示のようにも思われます。

ごあいさつ

熊本市長　大西　一史

「熊本市民美術展　熊本アートパレード」は、市民の皆様と共に創り、共に楽しむ「手作りの美術展」として親しまれ、平成元年の第1回開催から、今回で第28回目を迎えます。この間、市民の皆様から、合計11,150点ものご出品をいただいており、皆様の長年に亘る温かいご支援に、心から感謝申し上げる次第でございます。

さて、今回は、芸術を愛する幅広い年齢層の皆様から269点もの力作をご応募いただいております。昨年4月、熊本地震により、本市は大きな被害を受けました。地震発生直後は、避難者が最大11万人に上り、市民生活に重大な影響を及ぼし、当美術館においても被害を受け、一時閉館を余儀なくされました。芸術を愛する市民の方々の中にも、作品の制作が困難となった方も大勢いらっしゃったのではないかと思います。

このような中開催する本展は、審査員のヤノベケンジ様よりいただいた「未来のおみやげ」というテーマのもと、皆様の実にさまざまな思いが込められた絵画、造形作品などの力作が一堂に集まっています。ご来場の皆様におかれましては、感性あふれる作品の数々を心ゆくまでお楽しみいただくと同時に、熊本地震を乗り越え、復興への一歩を踏み出す熊本市民の思いを感じとっていただければと思います。

本市としましても、復興にあたり、文化芸術の持つ創造性がますます重要な役割を果たすものと考えておりますので、皆様には、今後とも本市の文化振興になお一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本展の開催にあたり、ご出品いただきました皆様、審査員のヤノベケンジ様、企画・運営にご協力いただきました「コラボレーターの会」並びに「熊本市老人クラブ連合会」をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼を申し上げますとともに、本展を通して市民の皆様の文化芸術活動がますます輝きを増し、相互の交流が一層深まりますことを心から祈念申し上げまして、ご挨拶といたします。

奨励賞

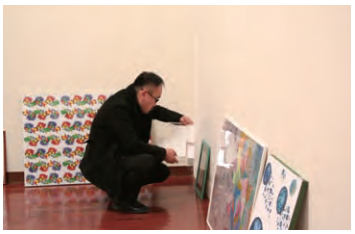
《小島地図》は、円形の中に緻密に描かれた作品です。様式にこだわらず、自分の世界を具体的に描こうとする姿勢、自分の欲求を絵画に焼き付けようという衝動のようなものを強く感じました。

《RiSA. あなたの未来は?》は、小さな子供がプレゼントを持っており、まさに未来におみやげを託していくというテーマです。背景の淡い色と洋服の強い色とのバランスもとてもいいです。

《包》は、とても気になる作品でした。ミニチュアの布団のようであり、また染物の工芸的な作品にも思えました。「包み込む」というのがおみやげのイメージに通じ、様々なことを想起させてくれる作品です。

《兆》には、暗闇の中で閃く新しい何か、あるいは明滅しながら再生するエネルギーのようなものが表現されていると思いました。まさに「兆し」です。シンプルな表現ですが、大変にダイナミックです。

《新しい季節》は、歌というメディアと映像というメディアの両方を豊かに使った、非常にクオリティの高い作品です。多くの人にポジティヴな未来を提供するような力を持っています。



濱崎文明《小島地図》
［平面部門］

松野久美子
《RiSA. あなたの未来は?》
［平面部門］

中島浩二《包》
［立体部門］

ギャバ釘本《兆》
［書部門］

野田ちか子《新しい季節》
［映像部門］

三藤有希子
《塚原のスタンダード“Standard of Tsukahara”》
［平面部門］

コラボレーターの会特別賞

コラボレーターの会特別賞**《塚原のスタンダード“Standard of Tsukahara”》**は、色が美しく、物語性に富んだ作品です。遺産や生い立ちといったものを想起させ、鑑賞していてとても楽しい気持ちにさせてくれます。

※本作品は、コラボレーターの会の皆さんが選ばれました。

MUSEUM INFORMATION

2016OCT-2017JAN

ジブリの立体建造物展

2016.10.29

スタジオジブリ作品の撮影担当者によるレクチャー

ジブリスペシャルレクチャー④

ジブリスペシャルレクチャーの第四弾として、スタジオジブリの撮影担当者・藪田順二さん（熊本出身）によるトークを開催しました。前半では動画や写真も紹介しながら、スタジオジブリにおけるアニメーション制作のプロセスや、撮影スタッフの役割をご紹介いただきました。「撮影」という名の役職ながら、画面上のきらめきや透過のエフェクトなどまで手がけられるというお話は、多くの方には意外だったようです。

後半にはジブリの日常についてお話しいただきました。何気ない日常の記録やエピソードからも、ジブリの皆さんが普段から身の回りの風景や人の動きをよく観察していること、そして各担当の分野で常に向上心を持って研究を続けている様子が窺えました。最後の質問コーナーでは、「お仕事をしていておもしろいと感じる瞬間は？」「カメラはどの会社のものが好きですか？」といった様々な質問を皆さんから受け付け、藪田さんはその一つ一つに丁寧に答えられていました。（K・M）【参加人数30人】

2017.1.9

入場者20万人を記録

「ジブリの立体建造物展」は県内外から連日多くの皆さんに足をお運びいただき、おかげさまで合計入場者数は20万人を超えました。当館展覧会でのこれまでの最多入場者数は「井上雄彦　最後のマンガ展」（2009）の79,508人でしたが、その記録を大きく塗り替えることになりました。震災からの復興の途上にあって、本展が、熊本のまちが活気を取り戻す一助となれたのであれば幸いです。（G・S）

詩の朗読会

くまもと詩の朗読の会共催の自作の詩の朗読会です

2016.10.27

詩の朗読会　第153回

テーマ「城」

10月のテーマは「城」。8名の方が詩を朗読しました。私たちにとって特別な存在である熊本城をはじめ、戦う城、守る城、権力の象徴、といった様々なお城のイメージが詠まれました。連れ添ってこられた旦那様との熊本城の思い出に人生を回想する詩もありました。「一国の一城の」をタイトルにした詩は、一城の主と自身を比較しながらも、一家の主として、震災の中で大切なものを守る姿が感じられました。また、家族が避難所で車を並べた姿にも一つ一つの「主」「城」が描写されていました。会の締めくくりは、城にちなんだ曲をハーモニカで演奏され、ほっこりと心が和みました。（Y・M）【参加人数8人】

2016.11.24

詩の朗読会　第154回

テーマ「窓」

11月は「窓」というテーマで、6名の方が詩を朗読されました。窓を単なる「建物の一部」として見るのではなく、今の世の中を見つめる「目」としてとらえた作品が多く、とても考えさせられる内容でした。今回、飛び入り参加の方はいらっしゃいませんでしたが、お一人、これから作る詩の構想を話してくださった方がいらっしゃいました。今後の朗読会が楽しみです。（K・M）【参加人数6人】

2016.12.22

詩の朗読会　第155回

テーマ「サンタ・クロースの家」

2016年最後の詩の朗読会は、クリスマス前ということで「サンタ・クロースの家」をテーマに、10名の方が詩を吟じてくれました。家でプレゼントを楽しみにしている子どもや冬の夜空、孤独なサンタ・クロースまで、様々なクリスマスの光景が目に浮かびました。飛び入り参加の方は初めて詩をつくられたそうですが、クリスマスソングも混ぜ込んだ素敵な作品でした。（M・I）【参加人数10人】

2016.11.6

GⅢ - vol.112

「伊藤有紀恵展 カラーラブポップ」CAMKレクチャーカレッジ「伊藤有紀恵の作品について」

「伊藤有紀恵展 カラーラブポップ」の関連イベントとして、企画担当者による講演会を開催しました。2011年、宮崎市美術展の審査での伊藤有紀恵さんの作品との出会いから、作品の特徴や見どころなどを紹介しました。

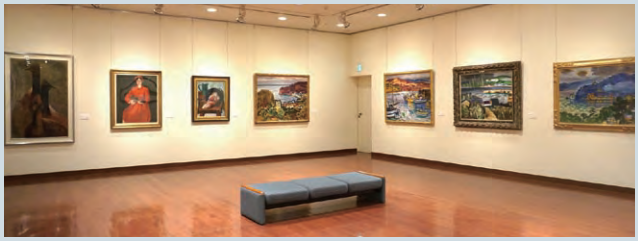
レクチャー前半は、デジタル作画や、セロハンの貼り絵で制作した伊藤さんの作品について、パターンの繰り返しを用いる点や、セロハンの生み出す透明感へのこだわり、輪郭線を描かずに作画することなどの特徴を示しました。そして、今回の展覧会に合わせて作られた最新作《いろんな　どうぶつたち》においては、これまでのシリーズとは違う複雑な表現が展開されている点において、若手作家ならではの一作ごとのダイナミックな進化が表れていることを紹介しました。

レクチャー後半は展示室に移動し、一点ずつの作品から、会場全体の展示構成の流れまでの解説を行いました。伊藤さんの作品の持つ色彩の豊かさや、セロハンの透明感の美しさを改めてじっくりと楽しみつつ作品を鑑賞。レクチャーの終わり頃には、伊藤さんの制作手法についても、さらに皆さんの興味が高まっていたようでした。（H・T）【参加人数20人】

2016.11.9-27

GⅢ - vol.113

「熊本市現代美術館所蔵作品より 被災作品 公開コンディションチェック展」



ギャラリーⅢでの113回目の企画として、「熊本市現代美術館所蔵作品より　被災作品公開コンディションチェック展」を開催しました。収蔵作品の地震による被害が一点ずつどのような状態なのかを確認・公開することは、震災の痕跡をしっかりと記録し残すことであり、収蔵館が行う大事な業務のひとつであると考えたことが本展開催のきっかけでした。会期は18日間で、それを3期に分けて毎週展示替えを行い、できるだけ多様な素材の例（版画、写真、油彩画、日本画、生人形、綿や布を用いた作品等）の観察を目的として作品を抜粋し、その状態を確認しました。出品作品には、荷崩れの下敷きになった作品、大きな揺れから額が歪んだ作品、収蔵庫の空調設備の故障により、高湿度の環境に数日間置かれた作品もありましたが、丁寧に作品の現状を観察し記録しました。

地元マスコミからの熱心な取材を受け、文化施設の被災状況と合わせ、美術作品の被災についても広く知っていただく機会となりました。（H・T）

2016.11.30-2017.2.26

GⅢ - vol.114

熊本市現代美術館コレクション展「形が変わることで見えるもの（見えないもの）」

ギャラリーⅢでの114回目の企画として、熊本市現代美術館コレクション展「形が変わることで見えるもの（見えないもの）」を開催しました。絵画作品を想像するとき、私たちはしばしば平面的な矩形のキャンバスに描かれたものを思い浮かべます。しかし中には、表現したいことに合わせて、その土台となるベースを規定の枠組みから独自に変形したり、組み合わせて広げたり、もしくはその枠組みを利用することで別の視覚表現を試みた作品もあります。本展ではそのような形を変えた当館のコレクション作品9点をご紹介しました。

また同会場では、河原町アートアワード2015熊本市現代美術館（CAMK）賞受賞作である上田耕平さんの《GEHENNA》（2015-、デジタル漫画原稿による映像）も同時期にご紹介しました（～2017年2月5日まで）。（M・I）

2016.12.17

「形が変わることで見えるもの（見えないもの）」展ギャラリートーク

「形が変わることで見えるもの（見えないもの）」展のギャラリートークを行いました。リラックスした雰囲気の中で、参加者からの質問にも随時お応えしながら一点一点鑑賞していきました。展示室に入って最初の、星加民雄さんの《揺らぎ・01・黒の中の青と赤》は、見る角度によって画面の色が変化。左右に歩きながら、見える色、だんだんと見えなくなっていく色をお客様も楽しんでいました。また梅本妙子さんの《無限につながる空間》は、自然な高さに見えるように、あえて他の作品よりも数値上少し高めに展示されていることなどもご紹介しました。画面に描かれているものはもちろん、そのフレームの形や位置によっても見え方は変わってくることが感じていただけたのではないでしょうか。（Y・M）【参加人数9人】

福岡市美術館ボランティアとの交流会

2016.10.30

福岡市美術館のボランティアさんが研修旅行で当館へおいでになり、CAMKEESと交流会を行いました。福岡市美術館は当館とボランティア同士の交流がある美術館のひとつで、当館のボランティア旅行でお世話になったこともあります。まず当館学芸員から当館におけるボランティア活動の概要や地震後の美術館の状況をご説明し、その後は互いの美術館やボランティア活動についての意見交換を行いました。会は和気あいあいとした雰囲気で進み、福岡市美術館ボランティアの皆さんに用意してきたくまモングッズをプレゼントするCAMKEESの姿も見られました。（K・O）【参加人数37人】

CAMK読みがたり　第86回 テーマ「みのりの秋」

2016.11.19

「みのりの秋」をテーマに、絵本『ばけばけはっぱ』、『さつまのおいも』や、手あそび「どんぐりどんぐりこーろころ」などをお届けしました。絵本『いーれーて』にも、おいしそうな食べものが次々に登場。うめぼしが、おにぎりに「いーれーて」と言うと、おにぎりは「いーいーよ」と答えます。こどもたちも「いーれーて」に「いーいーよ」と声を合わせて笑顔で迎えてくれました。手袋人形「とけっこう」では、人形のくまちゃんが子どもたちと握手。くまちゃんは「これからジブリ展を見に行くのよ」とウキウキとしながら皆とお話しました。（Y・M）【参加人数34人】

CAMK読みがたり　第87回 テーマ「クリスマス」

2016.12.17

12月のテーマは「クリスマス」。読みがたりボランティアさんや館スタッフもサンタ帽をかぶり、クリスマス気分を盛り上げました。今回ご紹介した本は、大型絵本『すてきな三にんぐみ』、紙芝居『みつごのこぶたのクリスマス』などなど。写真絵本『きらきら』は、様々な表情を持つ雪の結晶が堪能できる一冊で、雪の写真が谷川俊太郎さんの「きれいだね」「天から降ってきた星みたい」という言葉と合わさると、不思議とあたたかな気持ちになりました。最後の「ちいさなメリークリスマス」は、動物に合わせたサイズのクリスマスツリーを描く手遊びで、みんな立ち上がって楽しんでいました。今回も大盛況の読みがたりとなりました。（K・O）【参加人数57人】

CAMK読みがたり　第88回 テーマ「日本のおはなし」

2017.1.7

今月のテーマは「日本のおはなし」。今回は手袋人形「一羽のことりさん」、絵本『おおさむこさむ』、ペープサート（紙人形劇）「十二支のはじまり」などをご紹介しました。絵本『おもちのきもち』では、お餅がぺったんぺったんとつかれて「かわいそう…」とつぶやく子もいました。おなじみお手玉「ぎっちょぎっちょ」では、お手玉を使って新年の幸福を願って大人も子どももみんなで楽しみました。年明け最初の読みがたりは、お正月の雰囲気いっぱいの内容となりました。（K・O）【参加人数47人】

月曜ロードショー上映報告

毎週月曜日14時・17時より　無料
上映リスト（10／24～12／26）※2017年1月2・9日は休止

10月24日『パリところどころ』1965年　フランス映画　95分
10月31日『陽気な幽霊』1945年　イギリス映画　92分
11月7日『遠くの空に消えた』2007年　日本映画　144分
11月14日『うつくしいひと』2016年　日本映画　39分
＊チャリティ上映会（主催：菊池川流域さらくnet　共催：熊本市現代美術館　協力：くまもと映画製作実行委員会）
11月21日『ボルベール〈帰郷〉』2006年　スペイン映画　120分
11月28日『私の頭の中の消しゴム』2004年　韓国映画　117分
【特集】追悼 キアロスタミ監督
12月5日『友だちのうちはどこ？』1987年　イラン映画　83分
12月12日『そして人生はつづく』1992年　イラン映画　95分
12月19日『オリーブの林をぬけて』1994年　イラン映画　104分
12月26日『ライク・サムワン・イン・ラブ』2012年　日本＝フランス映画　109分

2016.11.17

11月ワークショップ「おはなし会と親子あそび」

11月のワークショップは、読みがたりでおなじみの「おはなしポット」さんをお招きして、「おはなし会と親子あそび」を行いました。まずはみんなで楽しく歌を歌って、緊張をときほぐします。続いて、『だるまさんの』や『やさいさん』などの絵本を読みました。おはなしの展開が気になり、絵本を食い入るように見つめる子どもたちのまなざしがとても印象的でした。さらに、季節は秋ということで、みんなでお芋ほりをすることに。お芋畑はなんとエプロンの中！全員で「よっこいしょ！」と声を合わせて、紐をひっぱると…？大収穫に子どもたちも大喜びです。その後もシフォン布や、手ぶくろ指人形を使った遊びを行い、盛りだくさんな一日でした。朝晩の冷え込みも厳しくなってきましたが、今回は親子でたくさんスキンシップをとって遊び、心も体もほっと温まる時間となりました。（K・M）【参加人数26人】

2016.12.15

12月ワークショップ「親子で挑戦!! フラワーアレンジメント」

前回たいへん好評だったフラワーアレンジメントが再登場！講師には、「花番地」店主の荻野厚子さんをお招きし、この時期にピッタリのフラワーアレンジメントを伝授していただきました。今回使った花材は、サンゴミズキ、バラ、ガーベラ、デンファレ、サンキライ、ヒゴノスギ、松ぼっくりの7種類。全体をバランスよく仕上げるコツや、サンゴミズキにリボンの飾りをつけてツリーに見立てるテクニックなど、細やかで具体的なアドバイスをもとに、思い思いの作品を仕上げていきました。ワークショップ中は、子育てサポートの方々に子どもたちを見ていてもらうこともできるので、みなさん安心してフラワーアレンジメントに取り組むことができました。花の種類や飾りを変えて、季節ごとに楽しんでいただきたいアレンジメントでした。（K・O）【参加人数21人】

2016.12.21-2017.1.16

今田淳子　HIGO-ROCK! HIGO-ROCCA!　第4弾 肥後山茶花公開

熊本在住の現代美術家・今田淳子さんによる肥後六花プロジェクト「HIGO-ROCK! HIGO-ROCCA!」の第4弾、肥後山茶花を公開しました。この作品には、今春に一般公募して市民の皆様にご寄贈いただいた古着物が素材の一部として使用されています。（現在募集は終了）

肥後山茶花のうち、「大錦」という品種をテーマに花を制作。ふんわりと満開に咲き誇る花の中から、かわいい女の子がぴょんと元気に飛び出てきたかのような躍動感ある作品です。

作品に隠れたキリンのモチーフは、熊本動植物園のマサイキリン「ラン」への追悼の想いも込められているとのことです。長生きして4頭の子供を産んだ「ラン」の、女性ならではのたくましさと、母性愛も重なってきます。

「山茶花の花言葉は、『永遠の愛』、『困難に立ち向かう』です。生と死の交錯する時空で、何事にも優先して考えられるべきことがあらわになった今、『大錦』の花を胸に人生を選択し、強く前進しましょう。」（作家からのメッセージ）（H・T）

本シリーズの作品は、以下の展覧会で全点公開されます。
「開館15周年記念　誉（ほまれ）のくまもと展」
会期：2017年9月16日（土）－11月26日（日）（予定）

2016.11.10

コーダヨーコ ワークショップ

「お面をつくろう」

熊本市立西原小学校支援学級の皆さんが、熊本市在住のイラストレーター・コーダヨーコさんのワークショップに参加してくれました。まずはお面にとめバンドを付ける作業から。お面を顔に当てながら、バンドの位置を決め、アクリル絵具を使って色塗りをします。「デザインどおりに色を塗ってもいいし、気持ちが変わったら違うデザインにしてもいいですよ」というコーダさんのアドバイスに、みなさん自由な気持ちで取り組めたようです。完成したお面をつけて集合写真。個性的なお面がたくさん完成しました！（Mi・I）

【参加人数28人】

2016.12.2

コーダヨーコ ワークショップ

「キーホルダーをつくろう ―いろんなかたち―」

熊本市立城北小学校支援学級の皆さんを対象に、コーダヨーコさんによるワークショップを実施しました。テーマは「同じではない、いろんな形があるからこそ、おもしろい」。好きな形の木片を選び、そこにアクリル絵具で顔を描いていきます。肌、髪の毛、顔と順々に描き加えていくと、木片から様々な顔や表情が表れました！できあがったみんなの顔は、素敵なキーホルダーになって学校に届けられます。（M・I）

【参加人数19人】

2016.11.12

ワークショップ

「絵描きのアドちゃんと顔はめ看板で遊ぼう」

熊本市北区のこどもまつりで、北区在住のアーティスト・アドさんと一緒に、顔はめ看板のお絵描きをして楽しい写真を撮るワークショップを実施しました。看板には、北区の花・ひまわりが咲き乱れる中に、アドさんが得意とするガゼル、ゴリラ、ハイエナ、ダチョウといったアフリカの動物たちが描かれています。参加者には、花、昆虫、小さな動物などを描き加えてもらって顔はめをしてもらい、多くの方に楽しんでいただきました。完成した看板は北区役所のエントランスに設置され、しばらくの間置かれていますので、ぜひ顔はめして遊んでみてくださいね！（Mi・I）

【参加人数３００人】

芸術文化出張講座

講師のアーティストとともに美術館をとび出し、学校などで実演やワークショップを行っています。

日付	学校名［学年・参加人数］	内容	講師
10.25	城山小［6年生139名］	声楽WS	福嶋由記　ほか
10.27	春竹小［全学生540名］	声楽WS	福嶋由記　ほか
11.11	弓削小［全学年338名］	現代邦楽C	松下知代　ほか
11.11	壺川小［全学年407名］	弦楽アンサンブルC	熊本ミュージックアーティスト
11.25	桜山中［全学年170名］	声楽WS	福嶋由記　ほか
11.30	城東小［全学年223名］	現代邦楽C	松下知代　ほか
12.02	健軍小［全学年660名］	現代邦楽C	松下知代　ほか

WS…ワークショップ

C…コンサート

声楽WS

現代邦楽C

弦楽アンサンブルC

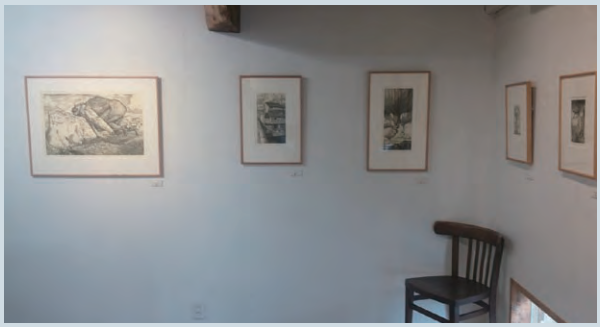
ART DE GYAN
アート・どぎゃん

熊本弁で「アートはどうなの？」という意味です

東弘治銅版画展

なかお画廊
熊本市東区佐土原1-13-2
☎096-368-9562
2016.11.12-20

熊本で活躍している銅版画家・東弘治さんの展覧会。作家によって刻まれた説得力のある線は、作家の心の中の物語を、風や温度、手触りまで織り込んで、生まれ育った風景の中に居るような懐かしさとリアリティをもって見せてくれた。会場を一巡りしたころには、まるで鳥になって、作家の心の底の風景に立ち会っていたかの様な不思議な感覚に包まれた。会場には制作時期の違う様々なテーマの銅版画作品が並び、年ごとに深まる作品世界を楽しめる内容となっていた。また会場には、版画作品だけでなく制作に欠かせないニードルや銅板なども展示されていた。遠方からも多くの方が来られていた。2年後に展覧会を予定しているとのことで、今から新作を楽しみにしている。（K・O）



Visitor's letter

アンケートに寄せられた感想（抜粋）を紹介します

「ジブリの立体建造物展」

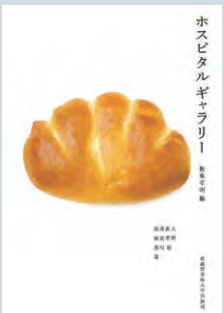
- 予想以上に良かったです。（市外50代女性）
- ジブリの細部までの建築・建材までとても興味深く知ることができました。（市外50代女性）
- 現場の方の講演では、毎回裏話が聞けるので面白いです。（市内20代男性）
- キャプションもとても興味深く、絵も一枚一枚じっくりと眺めることができてとっても気に入りました、また来たいです。（市外40代女性）
- 1つ1つの作品が、時間をかけて丁寧に作られていることがよく分かり、また、見るときの見方が変わり何回も見てみたくなった。とても奥が深いことが分かった。（市内40代女性）
- 東京で開催されていた本展をまさか熊本で観られるなんて！！とてもうれしかったです。（市外女性）
- 見応えがありました。素晴らしかったです。感動です。（市内70代女性）

ホームギャラリーからのお便り

ホームギャラリーからおすすめの一冊をご紹介します

VOL.31

『ホスピタルギャラリー』



編者：坂東孝明
出版：武蔵野美術大学出版局
2016年

小さい頃、体調を崩して何度か入院したことがありました。点滴につながれた体は自由がきかず、遊びにも行けないし食べたいものも食べられない。ただひたすら、白い天井についた染みを眺めて過ごしていたのを覚えています。

「病院」というと、得てして暗いイメージを抱きがちですが、そういったイメージを覆すような取り組みがこの本の中では紹介されています。舞台は徳島の大学病院。新しくできた病棟に、小さなギャラリーをつくるプロジェクトが立ち上がりました。患者さん、付き添いの人、病院で働くスタッフ、または病院に用事はないけれど、ちょっと寄ってみただけの人―その場に集う多様な人々に「ちょうどよい距離感」で寄り添うことのできる空間をつくるにはどうすれば良いか。その思考と実践の過程が綴られています。特筆すべきは、そのギャラリーに展示される作品は、美大に通う学生が授業で作ったものであるということです。素朴でくすっと笑える彼らの作品は、きっと今も病棟の雰囲気を和ませているに違いありません。

「医療」と「アート」という異なる分野の事物が融合し、人々に何らかの影響を与えた本書の例のように、これからも社会にはあっと驚くようなコラボレーションが生まれていくことでしょう。そんなとき、私たちもこれまでの常識にとらわれず楽しんで受け入れていきたいものですね。（K・M）

編集後記

おかげさまで、かつてない大盛況となった「ジブリの立体建造物展」。たくさんの方にご来場いただきうれしい反面、どうしても週末の会場内は混雑してしまい、一点一点をゆっくりご覧いただくのが難しい状態になってしまったのは申し訳なかったところです。終盤に一日8000人（！）の来場者があったときはさすがに驚きましたが、それでも何とかパンクせずに無事故で過ごすことができたのは、きっと今回の運営で少しはスタッフも鍛えられ成長したのかと…。

編集長　佐々木玄太郎

今年のアートパレード展は、地震の影響による出品者減を心配していましたが、10代から80代まで幅広く多くの方にご参加いただき、約270点ものご出品がありました。想いの詰まった作品の数々に、スタッフ一同、楽しみながら展示させていただきました。また、同時開催のシルバー作品展では、90代の方の作品も見られ、元気の秘訣は熱心になれる趣味を持つことなんだなぁとしみじみ感じました。

担当　大田黒翔代

［執筆者一覧］＊原稿の文末にイニシャル表記
冨澤治子（H・T）［熊本市現代美術館主任学芸員］
坂本顕子（A・S）［熊本市現代美術館主任学芸員］
佐々木玄太郎（G・S）［熊本市現代美術館学芸員］
池澤茉莉（M・I）［熊本市現代美術館学芸員］
岩崎美千子（Mi・I）［熊本市現代美術館学芸員］
丸吉ゆかり（Y・M）［熊本市現代美術館学芸アシスタント］
大田黒翔代（K・O）［熊本市現代美術館学芸アシスタント］
村上綾（A・M）［熊本市現代美術館学芸アシスタント］
三浦和紗（K・M）［熊本市現代美術館学芸アシスタント］

ART KISS LETTER アート・キッスレター
vol.80早春号（2017年2月）　【無料】
発行人：桜井武
編　集：佐々木玄太郎　大田黒翔代
デザイン：石井克昌（MOTOSHIKI）
印　刷：シモダ印刷
発　行：熊本市現代美術館
http://www.camk.or.jp
〒860-0845　熊本市中央区上通町2-3
電話 096-278-7500　FAX 096-359-7892
【次号は初夏号（5月発行予定）】

ジブリの立体建造物展

2016.11.13

「熊本の建物のこれから」シリーズ①

講演会「熊本城のこれから」

「ジブリの立体建造物展」の関連イベントとして、連続トーク「熊本の建物のこれから」がスタートしました。本展を機に熊本のまちの建物に目を向け、その未来を考えていこうというこのシリーズ。第一回は「熊本城のこれから」と題して、熊本城調査研究センターの網田龍生さんにお越しいただき、地震を受けた熊本城の現状と、これからの復旧計画についてお話しいただきました。

現在一般の方は立入不可能な区域も含め、数多くの現場写真を見ながら被害と対応の状況をご紹介いただきました。直接は目にすることができないお城の様子に、来場者の皆さんもじっと見入っていました。余震によって崩落した石垣もありましたが、それぞれの石垣がどのくらい危険な状態であるかは判断が非常に困難であるとのこと。また、文化財として保全することと、一般公開時の安全性を両立させることの難しさについても言及されました。地震を受け多くの損傷が発生しましたが、同時に、被災前にはわからなかった様々なことが目に見える状態にもなっています。

被災状況とそれへの対策・対応の現状を学ぶため、熊本城には他地域からも視察チームが頻繁に訪れているとのこと。熊本城の今後の安全対策は、他地域の重要な参考事例となっていくようです。これから20年後を目標に復旧を行っていく熊本城。復興のシンボルとしての意味はもちろん、文化財の保全のあり方という側面からも注目を集めています。（G・S）

【参加人数40人】

2016.11.27

「熊本の建物のこれから」シリーズ②

講演会「城下町のこれから」

「熊本の建物のこれから」の第二回として、新町古町町屋研究会の宮本茂史さん・長野聖二さんと、新町古町復興プロジェクトの吉野徹郎さんの計3名をお迎えして、熊本の城下町である新町と古町の建物の魅力や、地震後のその保存の取り組みについての講演会を開催しました。

はじめに長野さんから、街並みや町屋の建築についてのお話がありました。新町古町では、区画の変化はほぼなく、明治、大正、昭和とレイヤーが重なっていくようにできているという町のつくりから、町屋の定義や、同地区の建築的な特徴をお話しいただきました。加えて、改築でおしゃれに変わった町屋が活用されている例も紹介され、次世代につながる町屋の姿を知ることができました。

続いて宮本さんからは、新町古町町屋研究会のこれまでの活動をご紹介いただきました。自身も新町生まれで建設業を営むかたわら、町屋の調査や所有者との交流に始まり、町屋のおそうじ体験といったイベントの開催や、空家の活用のアドバイス、市電の敷石の再利用まで、家屋の所有者や有志との充実した10年の歩みに驚かされました。宮本さんは「目標があってやるというより、頼まれたことに応えてきたかんじです」と語られ、柔軟な姿勢が様々な活動につながっていく様子が窺えました。

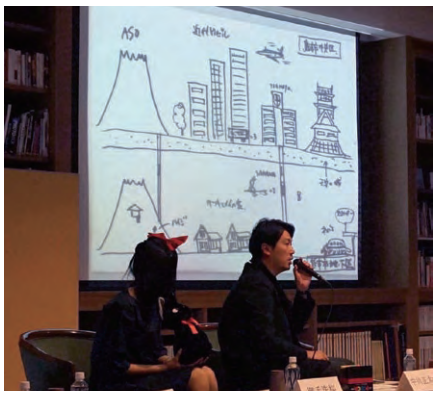
最後に吉野さんは、熊本地震後、避難生活を過ごすなかで発想したプロジェクト「おせっかいし隊」の活動を紹介。新町古町を中心として活動を行い、復興支援として家の片付けを手伝うだけではなく、補修できる部分などを伝えて適切な処置ができるようサポートするなど、建物も人の気持ちも前向きにする活動を展開されていることをお話しいただきました。身近な熊本の住まいに関する話題に、参加者のみなさんも聞き入っていました。（A・M）

【参加人数35人】

2016.12.4

「熊本の建物のこれから」シリーズ③

妄想会議 ～建物スペシャル～



「熊本の建物のこれから」の第三回として、「妄想会議 ～建物スペシャル～」を開催しました。あえて地に足を付けずに、自由な発想で熊本の未来を考えてみようというこの「妄想会議」。今回は、展覧会の監修者・藤森照信さんと企画者・青木貴之さんを特別ゲストに迎え、ジブリ作品の世界をヒントに熊本の建物のこれからを考えました。

前半はパネラーからの妄想披露。「ハウルの動く城」からヒントを得た「動く熊本城」や、まちの地下に「熊本市地下区」を作ってしまおうという構想など、さっそく奇想天外なアイデアが発表されました。建築の中に植物を取り込むことを試みてきた藤森さんからは、ビルの上の緑化計画などが提案され、そこから人の生活と自然の関わり方にまで話は広がっていきました。一方、青木さんからは、「天空の城ラピュタ」のオープニングシーンなども参照しながら、「人は土からは逃げられない」という考え方が示されました。

後半は、会場の皆さんからの妄想をピックアップしながら、まちの未来について議論を行いました。会場からは「地震のときには壁が外に倒れる、新しい構造の建物」や「必要なのは建物よりも大きな原っぱ！」など、発想を転換したユニークな提案が多数寄せられました。また、パネラーの提案した保育園構想に刺激を受けて、「世代をつなぐ保育」といったコミュニティのあり方に関わるアイデアも発表されました。

地震によって、当たり前だと思っていた生活の前提が崩れてしまった現在。しかしそんなときだからこそ、普段は意識もしていなかった自分たちの生き方そのものを根本から考え直し、新たな社会のあり方を構想できるのかもしれません。今回生まれた大胆な発想の数々と、それを起点に交わされた議論から、そんなことを感じられた妄想会議でした。（G・S）

【参加人数60人】